



クラシックの真髄

# 5002モデル

2001年に発表されたスカイムーン・トゥールビヨンは、パテック フィリップ初の手首に着用するダブルフェースのグランド・コンプリケーションであっただけではない。最初の天文腕時計であり、しかも最も複雑なものであった。この記念すべきモデルについて考察する。

文 ニコラス・フォークス 翻訳 小金井 良夫

芸術作品の鑑賞にあたっては、それが創作された状況を理解することが不可欠である。2001年はパテック フィリップにとって重要な年であった。新しいミレニアムの到来は、人々に省察の機会を与えた。この年、フィリップ・スターン氏が長い間育んできた大志が実現した。パテック フィリップ・ミュージアムがジュネーブの市中心にオープンしたのである。プラン・レ・ワットの現代的なパテック フィリップ本社工房が時計製作の未来を象徴しているのに対し、世界有数の時計博物館として広く知られるこのミュージアムは、時計製作の過去を体現している。同年、パテック フィリップは、当時最も複雑な腕時計であったスカイムーン・トゥールビヨンを発表し、時計製作における進歩のほどを人々に垣間見せた。

パテック フィリップでは過去と未来はきわめて密接に結びついており、この2つが重複する場合さえある。それは1989年、携帯時計キャリバー89が発表され、機械式時計への世界的な関心を蘇らせた時に起こった。新しいミレニアムの幕開けと共に、スターキャリバー2000が発表された時にもそれは起こった。なお、後者をキャリバー89の一種の続編、「もうひとつの」複雑懐中時計と見なすと、本質を完全に見失うことになる。

スターキャリバーは大きな時計である。1118個の部品から構成され、その重さは500グラム以上ある。それにもかかわらず、パテック フィリップの最も控えめな時計といえるかもしれない。アメリカの金びか時代の大富豪たちのために作られた、古典的なスーパー・コンプリケー

ションのような外観をこれに持たせることもできたであろう。しかしその内なる世界は、真の革新を体現していた。フィリップ・スターン氏が語るように、これは時代を反映するタイムピースであった。「進歩の強力な象徴である西暦2000年を迎えることは、私たちの創造性と技術的限界への挑戦を刺激しました」。スターン氏は、「過去と未来を結びつける橋」を構築しようとしていたのである。氏の目標は、「最も多くのコンプリケーションを搭載することではなく、以前は達成できないと考えられていた機能の組み合わせを実装すること」であった。

スカイムーン・トゥールビヨン5002モデルは、スターキャリバー2000と並んで開発され、これに数か月遅れて2001年に発表された。このタイムピースは、スターキャリバーの真髄を腕時計に凝縮し、文字通り神秘的な宇宙を手首に着用するという、哲学的な壮挙を実現したものである。スカイムーン・トゥールビヨンは毎年2点ずつ製作されており、マニユファクチュールパテック フィリップの波瀾に富んだ歴史において、疑いなく最も重要な腕時計のひとつである。

12の複雑機能を備えたパテック フィリップ初のダブルフェース腕時計、スカイムーン・トゥールビヨンは、新技術や新機能が試みられ、業

## 業界全体が革新の気運に溢れていた時期を予告するスカイムーン・トゥールビヨンの複雑機能は、よく知られたものであった。

業界全体が画期的な革新の気運に溢れていた、21世紀初頭の10年間を予告するものであった。搭載されたコンプリケーション機能のうち永久カレンダー、ミニット・リピーターという2つの機能は、パテック フィリップが独自に完成したものであり、驚異的な革新ではあっても、よく知られている。ミニット・リピーターは、ムーブメントをほぼ2周する長さのカセドラル・ゴングによる豊かな残響が特徴である。ゴングの合金は、ローザンヌ連邦工科大学の冶金学科と共同で開発された。今日この合金は周知となったが、20年前には画期的であった。

このタイムピースの今ひとつの革新的な特徴は、ケース径42・8ミリの腕時計に2つの時計が搭載されていることである。裏面には、恒星時と共に月、シリウス星、銀河が天文表示される。パテック フィリップの歴史に造詣の深い読者であれば、高名な2人のアメリカ人富豪グレイブスとバックカードが競って発注した、星座表を備えた著名な懐中時計を想起するであろう。

この天文表示を腕時計に搭載するという、さらに画期的な壮挙が行われたのである。それは容易ではなかった。パテック フィリップ技術陣は、すべての歯車の減速比の組合せ25兆の中から、搭載された全天文表示

について最も表示誤差を少なくできる組合せを発見しなければならなかった。ゴングの合金の場合と同様、洗練された天文表示を備えた時計がポピュラーとなっている。しかしこの機能の開発が、後にスターキャリバー2000を創作することになるチームが結成された1993年当時にまで遡ることを知れば、スカイムーン・トゥールビヨンがいかに未来を先取りしていたかが理解できる。

事実、スターキャリバー2000の発表当時に紹介された多くの特徴は、スカイムーン・トゥールビヨンにもそのまま当てはまる。それは「複雑な科学機器を中心に持った芸術作品」、「謎の多い宇宙に向けて開かれ、われわれを哲学者、賢者、美の愛好家となるように促す窓」であった。

スカイムーン・トゥールビヨンが見せる超小型の宇宙は、創造神を前にして人間がいかに小さいかという哲学的考察を与えてくれる。しかしこのタイムピースの精神的な次元は、インスピレーション、大胆さ、そして技術革新なくしては実現しなかったことも忘れてはならない。今日、スカイムーン・トゥールビヨンは、楽観主義と技術革新の時代を象徴する記念碑のようにわれわれの前に立っている。しかし、技術革新を単なる新しさと混同してはならない。新しさは陳腐化するが、真に革新的なものは古典となる。スカイムーン・トゥールビヨンが古典的作品であるのは、疑いを容れない。

◆ 「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」(Patek.com/magazine)にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。